

全学共通科目「地域インターンシップ」における 実践と教育効果に関する検証

山田 香織 (地域連携戦略室特命講師)
村山 卓 (地域マネジメント研究科教授)
鈴木 健大 (地域連携戦略室特命准教授)

1. はじめに

本論は、平成 25 (2013) 年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(以下、COC 事業と称す)に採択された香川大学「自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地(知)の拠点整備事業」において、地域連携教育プログラムの充実を意図して新設された「地域インターンシップ」(全学共通科目・主題 C)の平成 28 (2016) 年度実践記録である。本学 COC 事業の教育改革プログラムでは、県下の 7 市町ならびに香川県と連携し、学生が実践活動をおこなうことで、地域の課題解決に寄与し、卒業時に地域に愛着を持ち、自信を持って社会に出ることができる人材を育成することを目指している。プログラムの中核には、プロジェクト型科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト I ~ IV」が据えられている。対して、「地域インターンシップ」は同プロジェクトを補完するかたちで平成 26 (2014) 年度新設された科目である[香川大学 COC 事業に関するウェブページ]。したがって、今年度は開講 3 年目にあたる。

「インターンシップ」と冠する科目は、本学においてもすでに複数開講されているが、後述のとおり本科目は、既存のインターンシップとは趣旨を異にする部分がある。これにともない、科目新設にあたっては、学内の運営体制整備、受け入れ先開拓、そして教育プログラムの設計に新たに取り組む必要があった。一方、3 年目を迎えた今年度は 10 か所を越える受け入れ先を確保し、44 名(延べ 46 名)のインターンシップ生に活動の機会を提供することができた。

本論では、COC 事業最終年度である次年度を迎えるにあたり、今年度の本科目実施状況とアンケート結果等を基に科目内容を振り返り、次年度以降の実施体制の充実、ひいては「ポスト COC」を見据えた本科目継続にむけた課題の洗い出しをおこなってみたい。

2. 科目概要

2-1. 本科目のねらい

本科目は、地域での起業や地域づくりについて低年次の時期に体験・実践を通じて学修する科目である。「インターンシップ」というと、2 年次生、3 年次生が就職を意識して、企業・官庁等で就業体験や課題解決型の実践に取り組む形態が一般的である。これに対して本科目は、地域づくりの現場を実体験することに主眼をおいている。したがって、本科

目の到達目標も以下のとおり定めている。

1. 地域の課題解決に参画し、実際に地域に貢献できる。
2. 地域の課題解決に参画することにより、課題探求・解決力が身につく。
3. 地域の課題解決に参画することにより、能動的な学習をもたらす主体的な学びができる。

(本科目の到達目標：シラバスより)

2-2. 授業構成

本科目は授業開始当初、以下の3部構成（授業・実践・自学自習）とすることを計画した。なお、単位取得に必要な活動時間数は50時間であった。

【授業】

- ・ガイダンス（授業の概要説明とインターンシップの紹介）（1回）
- ・インターンシップ先の決定とインターンシップ先に関する学修（2回）
- ・活動報告会のための学修（2回）

【インターンシップ】地域に滞在もしくは定期訪問し、以下の実践をおこなう。

受け入れ先の方との地域課題についての話し合い、課題解決策の検討、課題解決のための実践、活動内容のふりかえり（今後の展望について自治体・住民等とも話し合い）

【自学自習】

期間中、地域に関する資料収集や読解を行い、またインターネット等により様々な事例を調べる。

(授業計画：シラバスより)

3. 今年度における実践

昨年度の実施状況については、『平成27年度香川大学地（知）の拠点整備事業地域インターンシップ成果報告書』にまとめているのでそちらをご覧ください〔原・村山・鈴木・山田 2016〕。以下では、これもふまえ、今年度の実践の全体像を論じていく。

3-1. 実施体制

(1) 担当教員

今年度は、昨年度から1名減の3名で本科目を実施した。インターンシップの事前事後の授業については3名の教員で合同実施し、インターンシップ活動は、村山が滞在型・男木島、鈴木が滞在型・小豆島、山田が訪問型全てを担当した。

担当教員は、教育的観点にたった学生指導のほか、それぞれが担当するプログラム設計・日程調整・交渉等、実施にかかるコーディネートを全般を担っている。滞在型についてはインターンシップ実施期間中引率をし、活動にかかる危機管理も合わせておこなった。

(2) 事務局サポート体制

学生の受け入れ先訪問等にかかる旅費（学生支援経費）手続きをはじめとする、インターンシップ活動に関する学内事務手続きは地域連携戦略室が担当している。後述のアンケート実施・データ整理も同室事務補佐員がおこなっている。一方、教育にかかる手続き（シラバス作成、覚書の取り交わし等）は修学支援グループの管轄業務となっている。

(3) 危機管理

本科目においては学外での活動を含むことから、受講生には、学生教育研究災害傷害保険（学研災）と学研災付帯賠償責任保険（学研賠）への加入を履修の前提条件として課している。このほか、活動が始まる前までに、受講生と受け入れ先との文書取り交わし（誓約書）、受講生と大学のあいだでの文書取り交わし（同意書）もおこなっている。

(4) 費用負担

本科目実施にあたっては学生旅費（交通費、滞在費）をはじめとする費用が発生する。香川県からの受託事業である滞在型プログラムについてはCOC事業・香川県受託事業費を充当している。一方、訪問型プログラムについては、受け入れ先負担、受け入れ先所在の自治体負担、もしくは文部科学省COC事業補助金で費用負担をしている。したがって、活動にあたって学生が旅費を自己負担することはない。

(5) 経済学部「(特) 地域インターンシップ」(自由科目、2年次生～)の追加開講

昨年度までの実績と受講生からの要望を受け、今年度は主題C「地域インターンシップ」のほかに経済学部自由科目として「(特) 地域インターンシップ」を開講した。本科目は「地域インターンシップ」と同一内容・時間割で開講であるが、「地域インターンシップ」が1年次より受講が可能であるのに対して2年次（他学部生は3年次）より受講可能とした。これにより、すでに主題Cの卒業要件単位数を確保している学生にも本プログラムの履修の機会を提供することができるようになった。これはまた、「地域インターンシップ」受講生として前年度までに本プログラムに参加した学生が、継続的もしくは再度実践活動に関与できる機会の確保を実現した。

(6) SNS サイトを活用した活動の情報発信

昨年同様、今年度においても、COC事業の情報発信を目的として立ち上げたSNS (Facebook) サイト「香川大学 自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地(知)の拠点整備」にて、地域インターンシップでの活動の様子を随時紹介した。記事執筆と投稿は担当教員がおこなった。受け入れ先団体が活動の様子を紹介してくださった際には、その記事を転載（シェア）させていただいた。また、後述する滞在型プログラムの他大学生募集の際は本サイトを利用した。

3-2. 履修状況と受け入れ先

以下で扱うデータ等は、地域インターンシップならびに（特）地域インターンシップの受講生に関するものである。

(1) 履修／参加状況

表1は本科目「地域インターンシップ／(特)地域インターンシップ」を履修／参加した学生数を学部別および学年別で示したものである。カッコ内の数字は、カッコ無しの数字のうち、(特)地域インターンシップの履修者数、斜字で表した数字は履修登録せず本科目に参加した学生数である。

表1 平成28(2016)年度地域インターンシップ／(特)地域インターンシップ履修／参加状況

	1年	2年	3年	4年	合計	参考：前年度
教育学部	8	0	0	0	8	2
法学部	2	0	0	0	2	3
経済学部	11	6 (5)	5 (5)	0	22	10
医学部	5	0	0	0	5	1
工学部	4	1	1	0	6	3
農学部	0	0	0	0	0	4
大学院	1	0	0	0	1	1
合計	31	7	6	0	44	24

受講生情報を基に筆者作成。

注：カッコ内数字はカッコ無し数字のうち(特)地域インターンシップ履修登録者数。

斜字体の数字は履修登録せず参加した学生数。

本表記載以外に滞在型プログラム(2ヶ所)に計8名の他大学生が参加。

今年度においては、計44名(延べ46名)の学生が地域インターンシップに参加した。昨年度の履修／参加学生数が計24名であるので、前年度比では183%の参加数となった。学部別では、経済学部生の参加が半数を占めており、これに教育学部、工学部、医学部生の履修／参加が続いた。昨年度との比較で特徴的な点は、昨年度4名の履修があった農学部の履修者数がゼロとなっている点である。

次に学年別の分布だが、昨年は約3割強(8名)が2年次生で、これ以外はほぼ全員が1年次生であったのに対し、今年度は、2年次生と3年生で約3割(各15%前後)を占めた。また、この履修のほとんどが経済学部生であり、かつ「(特)地域インターンシップ」の履修生であったことから、経済学部の2、3年次生にあっては、全学共通よりも同学部自由科目での履修にメリットを見出していることが窺える。

昨年度同様、今年度も履修登録をせずに本インターンシップに参加した学生がいた。工学部に2名、大学院に1名の計3名が該当する。このうち、工学部生は昨年度もしくは一昨年度本科目を受講し、以来継続して同一の受け入れ先で活動をしている学生で、大学院生は経済学研究科在籍のインバウンド観光に関する研究に取り組む学生で、自身の研究テーマと関連のある課題提示をした受け入れ先での活動に参加をした。彼ら3名には、活動はもとより、すでに受け入れ先担当者との信頼関係が構築されている点や、学部生に比べ

て社会人基礎力が高い点を活かして、関与する活動において、他の参加学生と受け入れ先のあいだをつなぐ役割も意識的に担ってもらった。

最後に、他大学生の参加について触れておきたい。本プログラムのうち滞在型プログラムには他大学生も参加している。プログラムの詳細は後述するが、香川県受託事業の同プログラムにおいては、本学大学生と他大学生が1:1の割合で、計6名程度の参加の下実施することが求められている。今年度は、滞在型（男木島）に4名、滞在型（小豆島）に4名の計8名の他大学生が参加した。

(2) 受け入れ先と活動学生数

次に受け入れ先と活動学生数を概観する。今年度は12の受け入れ先／プログラムを用意した（内訳：訪問型10、滞在型2／前年度：計8、訪問型5、滞在型3）（表2）。訪問型は、受け入れが今年度初となる団体が7か所、2年目が2ヶ所、3年目が1か所、滞在型は、実施は今年度で3回目で、男木島での実施が2年目、小豆島での実施が初だった。

募集上限人数は、滞在型が各3名、訪問型は活動内容、予算、受け入れ先担当者の対応可能な範囲等を考慮し、表2のとおりとした。そして、全12のプログラムのうち、11のプログラムで学生が活動をおこなった。学生の活動は、原則1人1か所としたが、学生からの希望が非常に強く、定員に達しておらず、予算的な面でも支障がないと判断した2名3か所についてはかけもちで活動をおこなった。したがって、参加学生の延べ人数は46名となる。また、訪問型では参加学生数がゼロであった箇所（通し番号10）についても、滞在型（小豆島）において活動させていただいた。

表2 平成28（2016）年度地域インターンシップ / (特) 地域インターンシップ受け入れ先および活動学生数

	受け入れ先名	所在地 活動場所	形式	実績*	募集上限	参加数
1	栗島 SILENT プロジェクト	三豊市	訪問型	3	5	5
2	瀬戸内国際芸術祭実行委員会	高松市ほか	訪問型	初	なし	8
3	高松市牟礼庵治商工会	高松市	訪問型	初	6	5
4	直島町地域おこし協力隊	直島町	訪問型	初	2	2
5	東かがわ市と相生ふるさと協議会	東かがわ市	訪問型	初	5	8
6	道の駅小豆島ふるさと村	小豆島町	訪問型	2	4	5
7	道の駅たからだの里さいた	三豊市	訪問型	2	3	3
8	NPO 法人まちづくり推進隊詫間	三豊市	訪問型	初	3	3
9	NPO 法人 CB (コミュニティ・ビジネス) しおのえ	高松市	訪問型	初	3	1
10	NPO 法人 Totie (トティエ)	小豆島町	訪問型	初	2	0
11	香川県定住促進プログラム (男木島)	高松市	滞在型	2	3	3
12	香川県定住促進プログラム (小豆島)	小豆島町	滞在型	初	3	3

受講生情報を基に筆者作成。*実績は本科目学生受け入れ実績。今年度受け入れが何年目であることを示す。

3-3. 授業内容

本節では、授業の進行に沿って、順番に本科目内容を概観する。

(1) 事前学修 (3回) : 学生と受け入れ先担当者のマッチング、事前レクチャー

今年度も昨年度同様に、実践活動に入る前に3回にわたる事前学修の時間を確保した。このうち、第1回ガイダンス(授業目的、インターンシップの流れ、危機管理・マナーの周知等)を除く第2回、第3回授業については、履修学生が前年度よりも増えたことや、前年度の受講生からの要望等を反映し、前年度より若干の変更を加えた。

第2回授業は、受け入れ先選びの時間とした。今年度は新たな試みとして、全ての受け入れ先担当者に授業にお越しいただき、団体説明、インターンシップ課題等についてプレゼンテーション(各3分間)をしていただいた。その後、学生が受け入れ先ブースを自由に訪れ、活動に関する質問や担当者と顔合わせをする時間を設け、学生にはこれをふまえて「活動希望書」を提出してもらい、これを基に活動場所の振り分けをおこなった¹⁾。続く第3回授業では、活動場所ごとに学生同士の自己紹介・連絡先交換をおこなったのち、外部講師による講義をおこなった。講義は二部構成とし、前半は、「香川県担当者による香川県の現状と地域振興施策」に関するレクチャー、後半は分科会形式で、「離島と離島振興施策について(県担当者)」、「道の駅について(四国地方整備局担当者)」、「地域おこし協力隊について(県地域おこし協力隊)」の3テーマを設け、活動場所や取り組むテーマに沿って各自受講するかたちとした。

(2) 実践(インターンシップ活動)

インターンシップは、50時間の活動時間確保が単位認定の前提条件となっている。インターンシップ生はこれに従い、各受け入れ先から提示された課題に取り組んだ。また、前述のとおり、本科目では、学期中より定期的に受け入れ先等を訪れ活動する【訪問型】と、夏季休暇中に他大学生と合同で集中的に活動する【滞在型】の2タイプでプログラムを展開した。以下ではタイプ別の実践内容を述べていく。

① 訪問型

延べ40名の学生が9ヶ所で活動をおこなった。受け入れ先は表2でも示したが、まちづくり団体等(5)、道の駅(2)²⁾、地域おこし協力隊(1)、石材組合(1)であった。

学生が取り組んだ課題は次の4タイプに類型できる。①地域づくり活動への参加(例:地域イベント企画運営補助)、②実施が決まっている/以前からルーティンワークである地域づくり関連事業・業務の補助(例:移住希望者向けウェブサイト掲載記事の取材・原稿作成、ボランティアガイドマニュアル作成とガイド実践、瀬戸内国際芸術祭作品受付)、③受け入れ先において必要性を理解しながら着手に至っていない事業推進のための提案・実践(例:インバウンド向けマップ作成、商品開発)、④受け入れ先が抱える課題解決に向けた状況把握のための調査・分析(例:トイレ環境改善、施設利用促進)。

このうち、タイプ①と②に取り組む学生は、受け入れ先担当者と直接連絡を取り合い、活動日を決めて現地を訪れ、担当者の指導の下で活動をおこなった。活動頻度は内容と学

生の都合に合わせて、学期中毎週1回、学期中は月1回と夏季休暇中に月2～3回程度、夏季休暇中集中的に活動するなどであった。一方、タイプ③と④は、現地において課題と現状把握をしたのちは、現地での活動よりも大学において、課題解決につながる提案に向けた情報収集、提案準備、アンケートの設計・実施・分析に時間を割いた。提案やアンケート内容の決定にあたっては、学生のミーティング（毎週1回）に担当教員が同席し、ある程度提案内容を固めると、受け入れ先担当者と学生が打ち合わせ・検討をおこない、その後、実践に移行した。課題タイプ③においては、年度内には看板、マップ、商品等、成果がかたちとなり、受け入れ先で利活用される見込みである。課題タイプ④についても、調査・分析結果を受け入れ先に提出しており、今後この結果を基に課題解決に取り組まれると聞いている。

② 滞在型

男木島と小豆島の2ヶ所において、それぞれ4泊5日、いずれも本学生3名と他大学生4名の7名ずつ計14名が参加した。滞在型は香川県の委託を受けて実施するもので、①若年人材のUIJターンの促進および活性化をはかること、②香川大学生と県外在住の大学生³⁾が合同で地域活動を実施すること、③1地域6名程度各5日間以上の活動をおこなうことが求められている。

今年度3年目を迎える本プログラムは、昨年度、男木島・豊島・直島の3か所で実施したところ他大学生の応募も多く、「香川県らしさ」を打ち出したプログラムとして香川県から高評価を得たことから、今年度も香川県内の離島で開催することとなった。プログラム設計は、自治体関係者の協力を得、また、これまでの教育活動で培ったネットワークを活用し、担当教員がすべておこなった。

男木島インターンシップは、島のまつりと瀬戸内国際芸術祭会期の8月上旬に実施することで、にぎやかな島の雰囲気になれる機会をつくり、島民が運営するビアガーデンの作業補助や芸術祭の受付業務、移住者が経営するカフェの手伝いをおこなった。最終日には、こうした作業を通じて学生が考えた男木島の活性化につながる3つの提案を住民の方に対しておこなった。一方、小豆島でのインターンシップは、瀬戸内国際芸術祭夏会期が終わり、島内が「日常」に戻る時期を狙って実施した。事前に実施回収した地元中高生対象のUターンイメージに関するアンケート、仕事体験、小豆島町内のUターンの方々へのヒアリングで得られた情報を基にして、最終日の成果報告会では、県ならびに町関係者に向けてUターン促進策を提案した。

(3) 事後学修：活動報告会、まとめレポート

① 活動報告会（9月30日実施：活動報告とワークショップ）

今年度は本授業のまとめとして活動報告会をおこなった。昨年度は準備不足のため実施に至らなかったが、昨年度の受講生より「他の活動についても聞いてみたかった」との声が挙がり実施した。実施にあたっては、学生間の情報共有による教育効果のほか、受け入れ先関係者間の情報共有、受け入れ先関係者ならびに関係機関関係者への成果報告を目的

とし、受講生のほか、受け入れ先担当者、関係機関関係者にお声掛けをし、出席者は計約70名に上った。

報告会は、前半の活動先毎のプレゼンテーション（持ち時間5分）と、後半の学生と受け入れ先担当者によるワークショップの2部構成（2時間半）でおこなった。プレゼンテーションでは、①活動メンバー、②受け入れ先様・ご担当者様・活動場所、③受け入れ先様から頂いた課題、④活動内容（いつ、どこで、何をしたのか、活動に対して何をどこまで達成したのか）を報告してもらった。聞き手には「活動報告メモ」を用意し、活動の特徴やワークショップで質問したい事項等を記録するよう促した。一方ワークショップでは、活動先の異なる学生同士、類似する課題提示を下させた担当者同士がディスカッションをできるようにグループを分け、ワールドカフェ形式で①活動／受け入れの感想と、②この授業を通して得られたことを今後どう生かしていくか、今後この授業に期待することを話し合ってもらい、最後にテーブル毎に発表してもらった。

② レポート

受講生には、活動報告会終了から約10日後を期限としてまとめレポートを提出してもらった。記述事項の詳細は、紙幅の関係上ここでは省略するが、活動概要と成果、得られた知見やスキルの今後の活用の見通しについて記述することを求めた。

4. アンケートに基づいた教育効果と運営体制の振り返り

本年度地域インターンシップでは、教育効果測定と運営体制の充実を目的とした2つのアンケートを実施した。前者は学期初と学期末（9月末）に受講生に対して実施した「振り返りアンケート」である。これは、COC事業の推進を通じて育成することとしている地域理解ならびに社会人基礎力の修得の度合いを測る同一設問に回答してもらい、結果を比較することで、教育効果の検証をおこなうものである。後者は、成果報告会時に受講生と受け入れ先担当者に対して実施した「運営に関するアンケート」で、課題ならびに活動／受け入れ負荷の度合いの確認と、今後のさらなる体制充実のための要望聴取をおこなった。以下では、各アンケート結果にふれながら、本科目プログラムの妥当性と今後の課題を明らかにする。

4-1. 教育的効果：振り返りアンケート（学期初／学期末）⁴⁾

ここでは「振り返りアンケート」の結果のうち、数値化できる設問の集計結果を紹介する。8つの設問は、(1)本科目に対する期待／達成度ならびに地域理解の度合い、(2)本科目履修を通じて涵養することが期待される社会人基礎力の修得度合いの2つに大別できる。データは、以下のとおりレーダーチャートで表した。また、凡例は次のとおりである。

【回答数】学期初 n=46、学期末 n=43

※以下のデータは、複数の受け入れ先で活動した学生（2名）について受け入れ先毎（＝

複数回) カウントしたものである。

【データ凡例】 実線：学期初、破線：学期末 パーセント表示：上部；学期初、下部；学期末

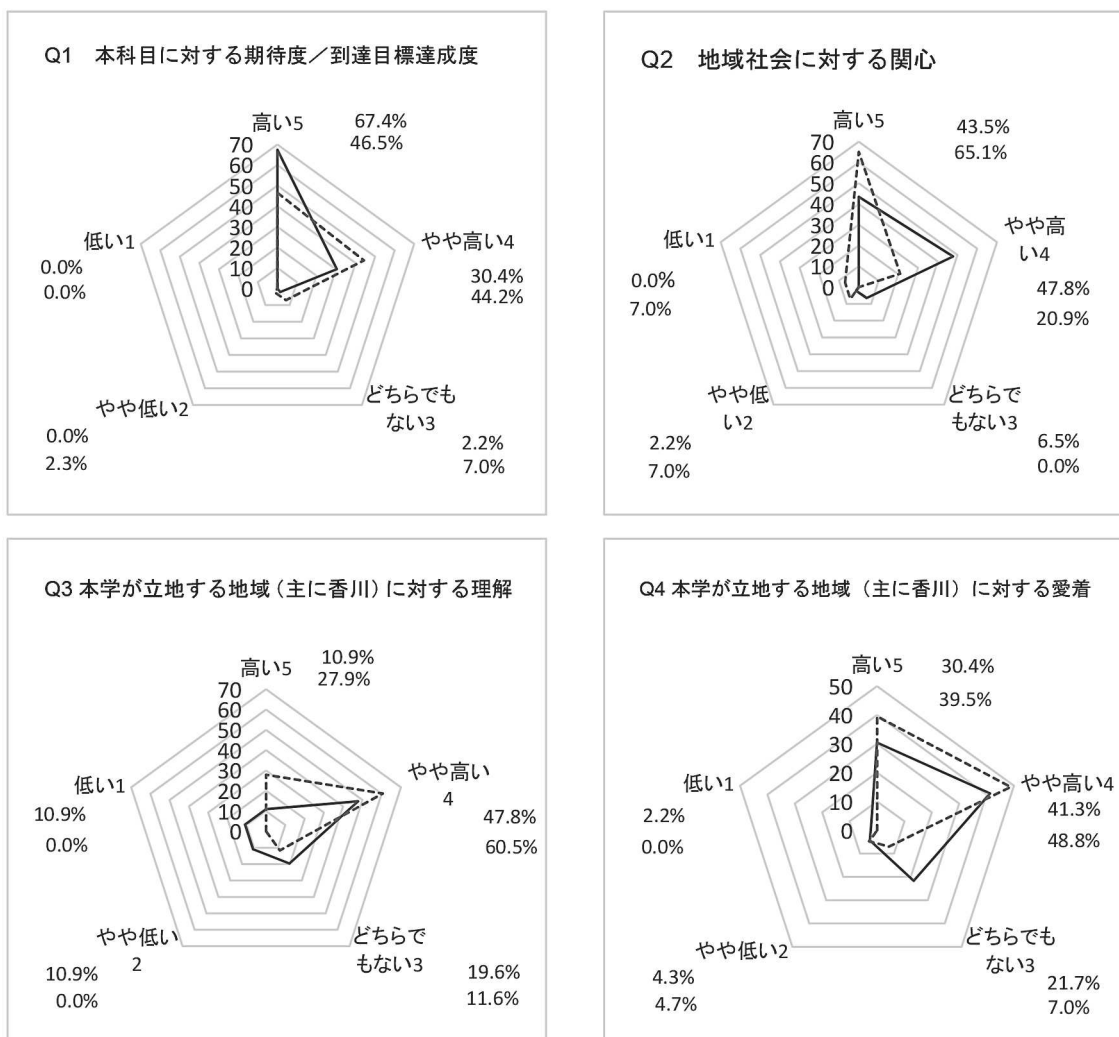
(1) 期待度 / 到達目標達成度、地域理解について (Q1 ~ Q4 : 表 3)

Q1 ~ Q4 の設問では、本科目に対する期待度 / 本科目到達目標達成度 (Q1)、地域理解に関連して、地域社会一般に対する関心度 (Q2)、香川に対する理解度 (Q3)、そして香川に対する愛着度 (Q4) について尋ねた。

Q1 の結果からは、本科目に対する期待度が非常に高かったこと、一方で、本科目到達目標達成度に関しては、約 9 割の学生が達成したと評価しているものの、「やや高い」がそのほぼ半数を占めていることから、受講生の若干控えめな自己評価の様子が窺える。

Q2 学期初データからは、もともと地域社会への興味関心が高い学生が本科目受講に至っていることを窺い知ることができる。また学期末データからは、「高い」と回答した学生が約 22%増の 65%まで延びている一方で、学期初には 0%に近かった「やや低い」「低い」

表 3 振り返りアンケート結果 (Q1 ~ Q4)



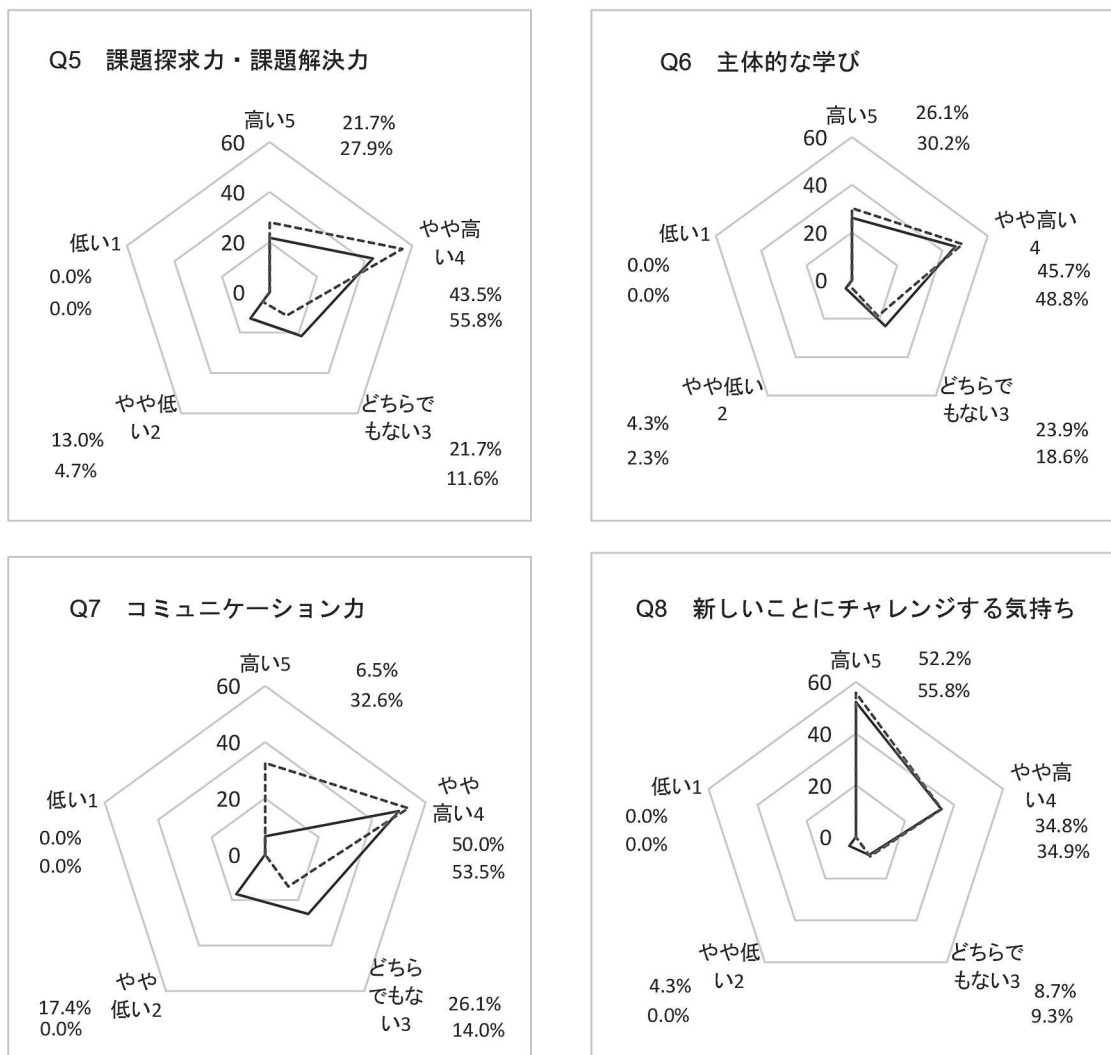
が全体の14%となったことが読み取れる。これは、授業を通じて現場に出向いたことで、自身の地域への関心の「実情」と向き合った結果のあらわれと捉えられないだろうか。

Q3は香川を主とする、本学が立地する地域への理解に関する設問であるが、学期初において「高い」「やや高い」と回答した割合が6割弱であったのに対し、学期末には3割増の9割弱にまで数値が上がっている。学期初2割強であった「低い」「やや低い」の回答が学期末に0%となった点も見逃すことができない。また、Q4については、「どちらでもない」が減少し、「高い」「やや高い」の割合が7割強から9割弱に増加した。

(2) 本科目を通じて涵養することを期待する社会人基礎力の修得 (Q5～Q8：表4)

Q5～Q8ではCOC事業において育成することを目指す人材に求められる力を測った。このうち、Q6「主体的な学び」とQ8「新しいことにチャレンジする気持ち」については学期初と学期末で変化はほとんどみられなかった。しかし、これは本科目受講生が本科目学期初時点でこうした姿勢を有する傾向にあることの証左といえる。一方、Q5「課題探

表4 振り返りアンケート結果 (Q5～Q8)



求力・課題解決力」、Q7「コミュニケーション力」の2つの設問に関しては、大きな変化がみられた。

Q5については、学期初においても「高い」「やや高い」で6割半を占めていたが、学期末になると8割強にまで割合が上がっている。これは、受け入れ先から頂いた課題の多くが、学生に、課題の洗い出し、課題解決方法の思考、それに基づく課題解決のアクションを求めるものであり、各自が自身の課題探求・解決力を振り絞らざるを得ない環境に身を置くこととなった結果であると推察することができる。

Q7においては著しい変化がみられる。学期初において「高い」「やや高い」が56.5%であったのに対し、学期末には86.1%まで値が伸びている。さらに詳しくみると、「高い」が学期初6.5%から学期末には32.6%にまで増えている。本アンケート記述式設問「この科目を通して身についたことは何ですか？」においても、コミュニケーション力を挙げている受講生の数は約半数に上っていた。この変化の背景は想像に難くない。受け入れ先担当者をはじめとし、異なる世代の方々との作業を行なうなかで連絡や調整、会話、また学生間での連絡や打ち合わせが不可欠となるなかで、非常に多くの学生が、コミュニケーション力を身につけ、またその必要性を痛感したのだろう。

以上の結果から、受講生は本授業において地域理解をすすめ、修得を期待する力を獲得したと読み取れることから、今年度の本科目は適切なプログラム提供ができたと評価してよいだろう。

4-2. 運営体制：運営に関するアンケート

表5、表6は活動報告会終了時に受講生と受け入れ先担当者ならびに関係者に実施した本科目運営に関するアンケートの集計結果である。インターンシップ活動の意義と活動／受け入れにかかる負荷の度合いを尋ね、各設問においてその理由についても記述式で回答してもらった。以下のグラフは、受講生と受け入れ先に分けて表した。

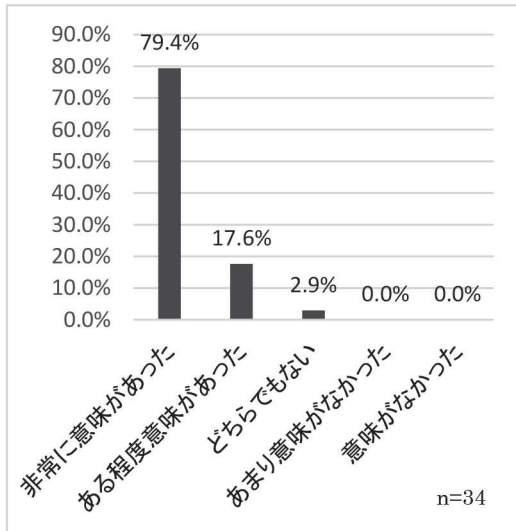
受講生の結果(表5)からみていくと、インターンシップ活動に「非常に意味があった」「ある程度意味があった」と回答した学生の割合は95%以上に上った。理由としては、本論4-1で紹介した自己評価で挙がっていた力の修得のほか、スキル(エクセル操作、アンケート分析、原価計算等)の修得、語学力の必要性の痛感、地域関与の難しさや自身の未熟さの理解などを挙げている学生が複数みられた。

活動の負荷については、「適切な程度」、「あまり負担なし」が約6割、「若干負担大」、「負担大」が4割弱に上った。後者の理由としては、役割分担・情報共有の難しさ、1人でひとつの課題に取り組むこととなり負担が大きかった、過密スケジュール(滞在型)、活動場所への移動距離の長さ、メンバー間での負担の偏りにともなう不公平感が挙げられていた。このほか、通年受講可能な授業構成してほしい、活動報告会の発表時間を長くしてほしい、活動内容の次年度受講生への継承ができるとよい、活動報告会で他グループの活動について

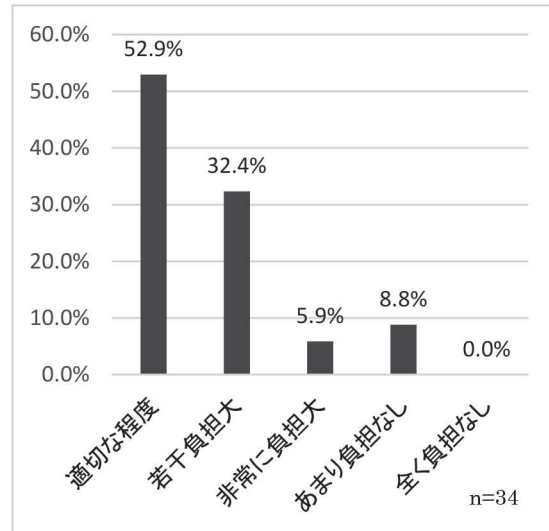
て情報共有ができ有意義だった、との要望や感想が複数名から寄せられた。

表5 運営に関するアンケート（受講生）

受講生：インターンシップ活動の意義



受講生：インターンシップ活動の負荷

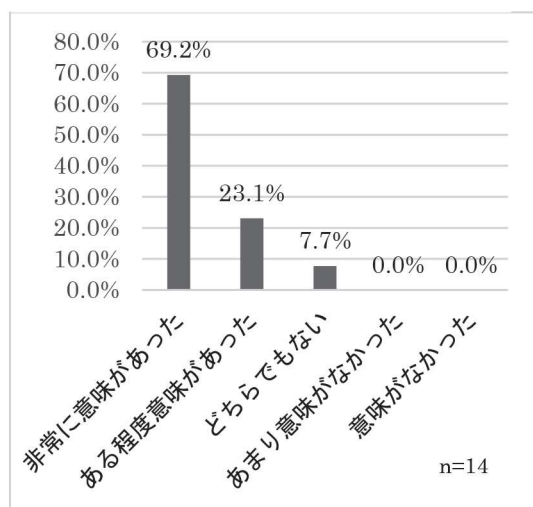


次に受け入れ先担当者の評価（表6）である。活動の意義については、「非常に意味があった」「ある程度意味があった」が90%強であった。理由としては、地元や産地関係者にない若い世代のアイデアを出してもらえた、これまでにない視点を提供してもらえた、課題を深く掘り下げてもらえた、学生指導が勉強になった等が挙げられた。一方、受け入れの負荷については、「適切な程度」、「あまり負担なし」、「全く負担なし」が75%、「若干負担大」が25%であった。後者の理由としては、受け入れ学生がそれぞれ別の課題に取り組むこととなり受け入れ側としても負担が大きかった、想定よりも学生のスキルが低く提示していた課題とのマッチングが難しかった等が挙げられていた。このほか、事前コミュニケーションの更なる充実と後期の活動継続に対する要望、受講生からの提案を受け入れ先である機関が活用することが重要である、活動報告会において他の活動について聞くことができ、また他の受け入れ先関係者と情報交換ができ有意義であったとの感想が挙がっていた。

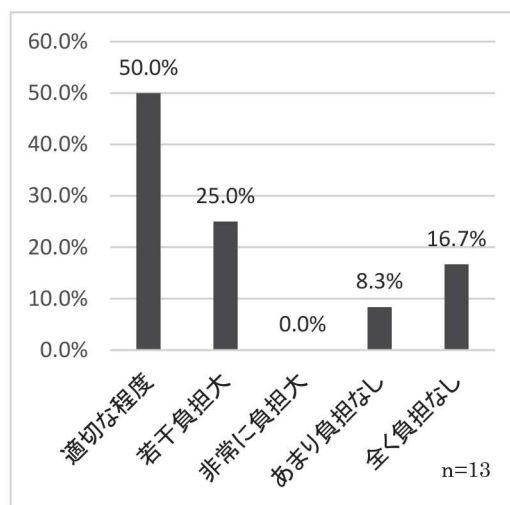
以上をふまえると、本科目の実施は、受講生・受け入れ先双方にとって一定以上の意義があったといえる。今後の更なる充実にあたっては、①活動場所決定前の受け入れ先担当者や講生のあいだでの情報交換の機会や、課題内容・移動距離等の説明のさらなる充実・徹底、②意欲のある学生が単位取得をしたうえで継続的に活動に関わることができる仕組みづくり、③学生・受け入れ先担当者双方の負担を考慮した課題・スケジュール設定、④活動成果報告会でのプレゼンテーション時間の確保が必要といえる。

表 6 運営に関するアンケート（受け入れ先）

受け入れ先担当者：インターンシップ活動の意義



受け入れ先担当者：受け入れの負荷



5. おわりに

COC 事業の一環として新設された全学共通科目「地域インターンシップ」は 3 年目を迎え、教育プログラム、運営体制がある程度整い、受け入れ先数と取り組み課題、受講者数とも、COC 事業計画書に掲げていた数値を上回るまでに至った。また、今年度初めて実施した「振り返りアンケート」では、本授業を通じて修得することを期待する社会人基礎力や、地域理解についても当初の計画どおり進んでおり、質的にも評価に値するプログラムになったと考える。

しかしながら、「運営に対するアンケート」では、更なる充実を期待する事項も挙げられており、今後、プログラム内容をマイナーチェンジする必要も少なからずある。また、本科目における教育効果のより精緻な検証には、追跡調査や本科目を受講していない学生の社会人基礎力や地域理解度に関する比較調査も必要だろう。

最後に、担当教員の立場から本科目を評価したい。本科目は上述のとおり、学生ならびに受け入れ機関に対し教育・社会貢献効果のある科目であり、継続実施が大いに期待される場所である。しかし、継続実施にあたっては、現・担当教員がいずれも任期付教員であることから、今後、担当教員を新たに充当する必要がある。また、担当教員が教育・運営コーディネーター全般を担っている現状に鑑みると、本科目担当が専任教員となることも想定し、今後は、大学事務局のバックアップ体制のさらなる強化（例：受け入れ先と教員・学生をつなぎ・調整をおこなうコーディネーターの配置）が期待される場所である。地域連携による教育プログラムの基礎ができたいま、次に取り組むべきは、学内におけるプログラム推進体制のさらなる強化ではないだろうか。

付記・謝辞

本科目実施にあたっては、学内外の多くの方々に多大なるご協力いただいた。紙幅の関係上、おひとりずつお名前を挙げることはできないが、ここに御礼申し上げる。

注

1) 活動希望書には第3候補まで挙げてもらった。結果、ほぼ全ての学生が希望する場所で活動するに至った。しかし一部募集上限を越えたところもあり、志望理由、受け入れ先担当者が面談で受けた印象等を勘案し、受け入れ先担当者の判断で選考をおこなった。また、募集上限を超えたものの、受け入れ先の判断で全学生受け入れの判断をいただいたケースもあった。

活動場所決定は履修登録期間も考慮しておこない、学生に周知した。

2) 道の駅（2ヶ所）でのインターンシップは、国土交通省が平成27年度より実施する「道の駅における大学との連携・交流」事業においてインターンシップ生受け入れを表明した県内道の駅に連携の打診をしたことで始まった。昨年度は4か所で実施。

3) 他大学生8名の内訳は、4名が関東圏の私立大学、2名が関西圏の国公立大学、1名が中国地区公立大学、1名が九州・沖縄地区の国立大学の学生で、7名が高年次生、1名が低年次生だった。出身地は香川県2名、香川以外の中国・四国地方3名、近畿1名、九州2名であった。

4) アンケートでは、以下で紹介する数字に評価のほか、記述式の回答を求める問い（例：本科目を通して身につけたいこと／身についたこと、現場と接するにあたって不安に思うこと／現場と接して得たこと）も設定したが、紙幅の関係上、本論では各回答への言及は行わないこととする。

参考文献

原直行・村山卓・鈴木健大・山田香織（2016）『平成27年度香川大学地（知）の拠点整備事業地域インターンシップ成果報告書』香川大学。

香川大学地（知）の拠点整備事業「自治体連携による瀬戸内地域の活性化と地（知）の拠点整備」教育プログラムに関する概要（<http://www.kagawa-u.ac.jp/coc/education/>）<2016年11月16日アクセス>